

得歟、一見セバヤト仰事アリケレバ、安候事トテ、後日書一卷持參云々、主上ハ裘ナドニヤト被思召ケルニ賦也ケリ、披御覽ジケレバ、君暗臣諛無所愬トアルヲモ、文旨之間不知之取出云々、伊陟不覺在此事云々、

〔大日本史贊藪二〕醍醐帝諸皇子傳贊

贊曰、醍醐諸子皆有材器、略中兼明親王博學能文、饒有曹植之才、居鼎鼐之重、兼傳保之任、施設將有可觀、而關白兼通欲使從兄賴忠代其位、乃尊之爲親王、其實疏而遠之、爲計深矣、親王不勝讒口之囂、冀賦兔裘以見志、亦可悲矣、世謂其子伊陟闇劣、失對於一條帝、遂以賦獻、此殆不然、縱雖至愚極陋之人、豈有不知賦之爲文、裘之爲物者哉、伊陟官至納言、職兼金吾、又豈有不知文字而可以居獻納之職者哉、當此時、權相用事、轉喉觸諱、親王憤世疾邪之志、無由上達、因帝之問、冀其經覽、果使至尊動容、則寓箴規於嘲笑、明先志於泉壤、見其知而未見其愚也、

〔天鏡一〕つぎのみかど圓融院天皇と申き、略中此御門の東宮にたゝせ給ふほどは、いとさゝく、いみじき事どもこそ侍れな、これはみな人のえろしめしたる事なれば、事もながしといめ侍りぬ、

〔讀史餘論一〕按するに大鏡にいふ所は、爲平○村上皇子を立すして圓融を太子とし、又源高明を流せし類をさすなるべし、略中村上崩じてのち、實賴爲平をすて、圓融を太弟とせし事は、爲平も帝の同母弟なりといへども、源高明○醍醐皇子が女其妃たれば、爲平もし傳位ならば、高明のために藤氏の權を奪るべしとおもひしが故也、高明終に罪せられしも、世人實賴が此舉を議するもの多きが故にみづから疑懼の心あるが故なるべし、さらば此事は村上始にあやまりて、實賴そのあやまりをかさねし也、

〔大鏡四右大臣師輔〕この后○村上の御はらには、式部卿の宮○爲こそは、冷泉院の御つぎに、まづ東